

代数 1

みかん猫^{1,*}

¹ ある猫カフェ

姑且随便写点啥

I. 予備知識

A. 数と演算

Definition I.1. $S \neq \emptyset$ を集合とし、写像 \oplus

$$\begin{aligned} S \times S &\longrightarrow S \\ (x, y) &\mapsto x \oplus y \end{aligned}$$

を二項演算とよぶ

Definition I.2. $a, b \in \mathbb{Z}, b \neq 0$ とする、 b が a を割り切る $\iff \exists c \in \mathbb{Z}, s.t. a = bc$ 、 $b|a$ で書く

Definition I.3. $a, b \in \mathbb{Z}$

1. $d \in \mathbb{Z}$ が a, b の公約数 $\iff d|a$ かつ $d|b$

2. $0 \leq d \in \mathbb{Z}$ が a, b の最大公約数

$\iff \forall a, b$ の公約数 d' に対して、 $d'|d$ をみたすこと. $\gcd(a, b) = d$ あるいは $(a, b) = d$ とかく. なお、 $(a, b) = 1$ のとき a, b は互いに素とよぶ

Theorem I.4. ユークリッドの互除法

$a, b \in \mathbb{N}$ 、数列 $\{a_n\}_{n \geq 0}$ を次のように定める:

$$\begin{aligned} a_0 &= a \\ a_1 &= b \\ a_{i-1} &= a_i \cdot q_i + a_{i+1} \quad (i \geq 1) \\ 0 &\leq a_{i+1} < a_i \end{aligned}$$

このとき $\exists N \in \mathbb{N}, s.t. a_{N+1} = 0$ となり、 $\gcd(a, b) = a_N$

Proof. $(a_{i-1}, a_i) = (a_i, a_{i+1})$ をいう

\therefore 左辺を d 、右辺を d' とする. $d|a_{i-1}, a_i$ より、 $d|a_{i+1} = a_{i-1} - a_i q_i$

よって d は a_i と a_{i+1} の公約数、 $d|d'$. また、 $d'|a_i$ かつ $d'|a_{i+1}, d'|a_{i-1} = a_i q_i + a_{i+1}$

よって d' は a_{i-1} と a_i の公約数、 $d'|d$

以上より $d = d'$

$\{a_n\}$ は単調減少の非負数列より、 $\exists a_{N+1} = 0$. $(a, b) = (a_0, a_1) = \cdots = (a_{N-1}, a_N) = (a_N, a_{N+1} = 0)$

よって $a_{N-1} = a_N q_N, (a, b) = (a_{N-1}, a_N) = a_N$ □

Proposition I.5. 拡張ユークリッドの互除法

$a, b \in \mathbb{Z}$ は 0 でないとする、 $\exists u, v \in \mathbb{Z}, au + bv = (a, b)$. u, v の求め方

Proof.

$$\begin{aligned} \begin{pmatrix} x_{11} & x_{12} & \alpha \\ x_{21} & x_{22} & \beta \end{pmatrix} \begin{matrix} \textcircled{1} \\ \textcircled{2} \end{matrix} &\longrightarrow \begin{pmatrix} \textcircled{2} \\ \textcircled{1} - q \times \textcircled{2} \end{pmatrix} \\ &= \begin{pmatrix} x_{21} & x_{22} & \beta \\ x_{11} - qx_{21} & x_{12} - qx_{22} & \alpha - q\beta \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$\begin{pmatrix} 1 & 0 & a \\ 0 & 1 & b \end{pmatrix}$ から始めて次々に上の変形をすると、 $(2, 3)$ 成分が 0 の行列が出る

これを $\begin{pmatrix} u & v & d \\ u' & v' & 0 \end{pmatrix}$ とおくと、 $d = (a, b), au + bv = (a, b)$ が成立 ($au' + bv' = 0$ も成立) □

Example I.6. $135u + 48v = (135, 48)$ となる $u, v \in \mathbb{Z}$ を求める

Proof.

$$\begin{aligned}
 \begin{pmatrix} 1 & 0 & 135 \\ 0 & 1 & 48 \end{pmatrix} &\rightarrow \begin{pmatrix} 0 & 1 & 48 \\ 1 & -2 & 39 \end{pmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{pmatrix} 1 & -2 & 39 \\ -1 & 3 & 9 \end{pmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{pmatrix} -1 & 3 & 9 \\ 5 & -14 & 3 \end{pmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{pmatrix} 5 & -14 & 3 \\ -16 & 45 & 0 \end{pmatrix} \\
 135 \times 5 + 48 \times (-14) &= 3
 \end{aligned}$$

□

Example I.7.

$$\begin{aligned}
 6731 &= 4717 \cdot 1 + 2014 \\
 4717 &= 2014 \cdot 2 + 689 \\
 2014 &= 689 \cdot 2 + 636 \\
 689 &= 636 \cdot 1 + 53 \\
 636 &= 53 \cdot 12 + 0
 \end{aligned}$$

$$\gcd(6731, 4717) = 53$$

Corollary I.8. $6717\mathbb{Z} + 4717\mathbb{Z} = 53\mathbb{Z}$

$$\Rightarrow x, y \in \mathbb{Z} : 6731x + 4717y = 53 \iff \begin{bmatrix} 1 & 0 & 6731 \\ 0 & 1 & 4717 \end{bmatrix}$$

$$\begin{aligned}
 \begin{bmatrix} 1 & 0 & 6731 \\ 0 & 1 & 4717 \end{bmatrix} &\rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 2014 \\ 0 & 1 & 4717 \end{bmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{bmatrix} 1 & -1 & 2014 \\ -2 & 3 & 689 \end{bmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{bmatrix} 5 & -7 & 636 \\ -2 & 3 & 689 \end{bmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{bmatrix} 5 & -7 & 636 \\ -7 & 10 & 53 \end{bmatrix} \\
 &\rightarrow \begin{bmatrix} 77 & 127 & 0 \\ -7 & 10 & 53 \end{bmatrix} \\
 -7 \cdot 6731 + 10 \cdot 4717 &= 53
 \end{aligned}$$

Remark I.9. $a, b \in \mathbb{Z}, d = (a, b), au + bv = d$ に対し、 $u = u_0, v = v_0$ を整数解

このとき、任意の整数解は $u = u_0 + \frac{b}{d}k, v = v_0 - \frac{a}{d}k (k \in \mathbb{Z})$

II. 群の定義と例

Definition II.1. 群 (G, \cdot) というのは、集合 G である二項演算 \cdot を与えて、その二項演算 \cdot は以下の条件を全てみたすこと

1. (閉) $\forall x, y \in G, x \cdot y \in G$
2. (結合律) $\forall x, y, z \in G, x \cdot (y \cdot z) = (x \cdot y) \cdot z$
3. (単位元) $\exists e \in G, s.t. \forall x \in G, e \cdot x = x \cdot e = x$
4. (逆元) $\forall x \in G, \exists y \in G, s.t. x \cdot y = y \cdot x = e$. このとき、 $y = x^{-1}$ で表す

また、(1) ~ (2) だけみたすと G は半群であり、(1) ~ (3) だけみたすと G はモノイド (monoid) とよぶ
 Definition II.2. 群 G の元の数をも群の位数とよび、 $|G|$ で表す. また、群の定義の閉より、 $\forall x \in G, \exists n \in \mathbb{N}, s.t. x^n = e$ 、最も小さい n を群の元の位数とよび、 $O(x)$ または $ord(x)$ で表す

Proposition II.3. G : 群

1. $O(a) = O(a^{-1})$
2. $\forall g \in G, O(gag^{-1}) = O(a)$
3. $O(a) = n$ なら、 $O(a^r) = \frac{n}{(n, r)}$

Proof. G : 群

1. $O(a) = n$ とすると、 a^{-1} は逆元であるから $(a^{-1})^n = (a^n)^{-1} = e^{-1} = e$. 逆に、 $O(a^{-1}) = m$ とすると、 $(a^m)^{-1} = (a^{-1})^m = e$ から、 $O(a) \mid m$. (なぜなら $O(a)$ は $a^n = e$ をみたす最小の n). よって、 $m \mid n, n \mid m$ より、 $O(a) = n = m = O(a^{-1})$
2. $O(gag^{-1}) = n$ とすると、 $(gag^{-1})^n = ga(g^{-1}g)a(g^{-1}g) \cdots (g^{-1}g)ag^{-1} = ga^n g^{-1} = e$ から、 $a^n = e$ で、 $O(a) \mid n$. 逆に、 $O(a) = m$ とすると、 $a^m = e, ga^m g^{-1} = gg^{-1} = e, \dots, g^m a^m (g^{-1})^m = e$ から、 $O(gag^{-1}) \mid m$. よって、 $m \mid n, n \mid m$ より、 $O(gag^{-1}) = n = m = O(a)$
3. $(n, r) = d, O(a^r) = k$ とする. $a^{\frac{r}{d}n} = e$ から、 $k \mid \frac{n}{d}$. $a^{rk} = e$ より、 $n \mid rk$ から、 $\frac{n}{d} \mid \frac{r}{d}k$. また $d = (n, r)$ から、 $\left(\frac{n}{d}, \frac{r}{d}\right) = 1$ 、よって $\frac{n}{d} \mid k$ で、 $k = \frac{n}{d}$

□

Example II.4. 1. \mathbb{Z} は $+$ の計算で群になる

2. n 個の元からなる集合 G を $\{0, 1, \dots, n-1\}$ で書き、二項演算を $\bmod n$ での加法とすると、この群を C_n または $\mathbb{Z}/n\mathbb{Z}$ で表す
3. 集合の元を互換からなる置換 σ という二項演算で群になる
 - (a) $\sigma' \circ \sigma$ も置換であるから、閉
 - (b) 結合律はある数字を代入すればいい
 - (c) $id \circ \sigma = \sigma \circ id = \sigma$ から、単位元は恒等写像
 - (d) $\forall f$ は全射であるから、 $\forall i \in K, \exists j \in K, s.t. f(j) = i$ 、また f は単射であるから、 $f^{-1}: K \rightarrow K$ は一々対応だから、 f^{-1} は逆元である
4. $D_n = \langle \sigma, \tau : \sigma^n = \tau^2 = e, \tau\sigma\tau^{-1} = \sigma^{-1} \rangle$ は回すと鏡映操作からなる二面体群である
5. $GL(n) = \{A \in M(n) \mid \det(A) \neq 0\}$
6. $SL(n) = \{A \in M(n) \mid \det(A) = 1\}$
7. $O(n) = \{Q \in GL(n) \mid QQ^T = Q^T Q = I\}$

Proposition II.5. 単位元と逆元は一意的に存在する

Proof. 1. $e, e' \in G$ はともに単位元であるとする、 $\forall g \in G, g \circ e' = e' \circ g = g = e \circ g = g \circ e$. すると $e' = e \circ e' = e' \circ e, e = e \circ e' = e' \circ e$. よって $e = e'$

2. $\forall g \in G$ に対し、逆元 γ, γ' が存在すると仮定すると $g \circ \gamma' = \gamma' \circ g = e = g \circ \gamma = \gamma \circ g$. すると

$$\begin{aligned}
 \gamma' &= \gamma' \circ e \\
 &= \gamma' \circ (g \circ \gamma) \\
 &= (\gamma' \circ g) \circ \gamma \\
 &= e \circ \gamma \\
 &= \gamma
 \end{aligned}$$

□

Corollary II.6. 左単位元と右単位元は必ず同じで、左逆元と右逆元も必ず同じである

Definition II.7. 集合 X 上の対称群は X から X への全単射からなる集合であり、 S_X または $Sym(X)$ で表す

Definition II.8. (G, \circ) : 群

$\forall a, b \in G, a \circ b = b \circ a$ をみたすと、 (G, \circ) を交換群またはアーベル群とよぶ

III. 部分群と剰余類

Definition III.1. G 群、 $H (\neq \emptyset) \subseteq G$

H が G の部分群であるとは G の演算で H も群になること. これは次の条件に同値

1. $e_G \in H$
2. $\forall x, y \in H \implies xy \in H$
3. $\forall x \in H \implies x^{-1} \in H$

Theorem III.2. G : 群、 $H (\neq \emptyset) \subset G$

$$H \text{ は } G \text{ の部分群} \iff \forall x, y \in H, x^{-1}y \in H$$

Proof. (\Leftarrow)

1. $\forall x, y \in H, x^{-1} \in H$ 、すると $xy = (x^{-1})^{-1}y \in H$
2. $x \in H$ を任意に取り、 $y = x$ とすると $e = y^{-1}x \in H$
3. $H \subset G$ より、 H での結合律は成立する
4. $x \in G$ より、 $x^{-1} \in G$ は必ず存在する. また、 $x \in H, y = e \in H$ を取ると $x^{-1} = x^{-1}e = x^{-1}y \in H$

(\Rightarrow)

$\forall x, y \in H$ 、 H が群であるから、 H の閉性より、 $x^{-1}y \in H$

□

Definition III.3. G : 群、 $S \subset G$

$$\langle S \rangle = \{s_1^{e_1} \cdots s_n^{e_n} : n \in \mathbb{N}, s_i \in S, e_i = \pm 1\}$$

$G = \langle S \rangle$ であれば、 S は G を生成するといひ、 S の元を生成元と呼ばれる. S が空集合であれば、 $\langle S \rangle$ は自明群 $\{e\}$ である

Definition III.4. G : 群、 $H \subset G$: 部分群

$\forall x \in G, xH := \{xh | h \in H\}$ は部分群 H が x に関する左剰余類である

同様に、 $\forall x \in G, Hx := \{hx | h \in H\}$ は部分群 H が x に関する右剰余類である

左剰余類と右剰余類は対称性より区別できないから、以下説明がない場合は左剰余類しか考えない

Proposition III.5. H は群、 $h \in H$ なら $hH = H$

Proof. 群の閉性より、 $\forall h \in H, \forall h_0 \in H, hh_0 \in H$ から、 $hH \subseteq H$. $h_0 \in H$ を任意にとると、逆元の実在性より、 $\forall h \in H, \exists h^{-1} \in H$. また、閉であることより $h^{-1}h_0 \in H$ から、 $h_0 = hh^{-1}h_0 \in hH$, i.e. $H \subseteq hH$. よって、 $hH = H$

□

Definition III.6. G : 群、 $H \subset G$

H が G での指数というのは G における左剰余類または右剰余類のかずであり、 $|G : H|$ または $[G : H]$ または $(G : H)$ で表す

Example III.7. 1. $n\mathbb{Z}$ の k に関する左剰余類は $k + n\mathbb{Z}$ で表す. $n\mathbb{Z}$ の異なる左剰余類の数は n 個である

2. 剰余類は必ず部分群になることではない、例えば $1 + 6\mathbb{Z}$ は単位元が実在しない

Theorem III.8. 剰余類分解は同値関係

Proof. (左剰余類だけ証明する)

G : 群、 $x, y \in G, H \subset G, y \in xH \iff x^{-1}y \in H$. 以下はこれを使って「 $x \sim y \iff x, y$ は同じ左剰余類に属している」という関係は同値関係を証明する.

1. $\forall x \in G, e \in H$ から、 $x = xe \in xH, x \sim x$
2. $x^{-1}y \in H$ とすると、 H は群であるから $y^{-1}x = (x^{-1}y)^{-1} \in H$. i.e. $x \in yH, y \sim x$
3. $x^{-1}y \in H, y^{-1}z \in H$ とすると、 H が閉であるから、 $(x^{-1}y)(y^{-1}z) = x^{-1}z \in H, x \sim z$

□

Definition III.9. G : 群、 $H \subset G$

$\forall x, y \in G, x, y$ が同じ左剰余類に属していると、 x と y は法 H に関して合同という

Theorem III.10 (Lagrange の定理). G : 群、 $H \subset G$ は部分群なら $\frac{|G|}{|H|} \in \mathbb{Z}$

Proof. $x \in G$ とする. xH の定義より、 $|xH| \leq |H|$. また、群の演算の一意性より、 $|xH| = |H|$. 左剰余類は互いに交わらないから、各 x は xH に属する. よって、 $|G|$ は各左剰余類の濃度の和で、 $|H|$ の倍数である □

左剰余類の間での演算は必ず閉ではないが、どの条件をみたせば閉になるのか? $x, y \in G$ とし、それらの左剰余類はそれぞれ xH, yH で、 $xH = \{xh_1|h_1 \in H\}, yH = \{yh_2|h_2 \in H\}$ から、 $xHyH := \{xh_1yh_2|h_1, h_2 \in H\}$ とする. xh_1y と xh_2y は同じ左剰余類に属していると仮定すると、 $(xh_1y)^{-1}(xh_2y) \in H, (xh_1y)^{-1} = y^{-1}h_1^{-1}x^{-1}$ から、 $y^{-1}h_1^{-1}x^{-1}xh_2y \in H$ 、言い換えれば $y^{-1}h_1^{-1}h_2y \in H$. ここで $y \in G, h_1, h_2 \in H$ から、 $\forall y \in G, y^{-1}Hy := \{y^{-1}h_1y|h_1 \in H\} \subseteq H$ が成立すれば、その演算が閉になる

群の演算の一意性より、 $g^{-1}Hg \subseteq H$ から $|g^{-1}Hg| = |H|$ が得られるから、その必要な条件は $g^{-1}Hg = H$, i.e. $Hg = gH$ 、言い換えれば左剰余類は右剰余類となじである

Definition III.11. 以上の条件をみたす部分群は正規部分群とよび、 H は G の正規部分群であることを $H \triangleleft G$ または $G \triangleright H$ で表す. もつと簡単にいうと、 $H \triangleleft G \iff \forall h_i \in H, \forall g \in G, gh_i g^{-1} \in H$

上の説明よりこの演算は閉から、(2) ~ (4) をチェックすればいい

1. $x, y, z \in G, \forall h_i \in H, (xh_1yh_2)zh_3 = xh_1(yh_2zh_3)$ から、 $(xHyH)zH = xH(yHzH)$
2. $\forall h_i \in H, h_iH = Hh_i = H$ (閉より) から、 H は単位元
3. $xHx^{-1}H = HH = H$

Definition III.12. これより、左剰余類の集合での演算があつて、この演算と左剰余類の集合で群になる. この群を G が法 H に関して合同する商群であり、 G/H で表す. Lagrange の定理より、 $|G/H| = \frac{|G|}{|H|}$

Proposition III.13. G : 群、 $N \triangleleft G, \forall g \in G, NgN = gN$

Proof. ここは剰余類の演算であるから、 $\forall g \in G$ 、単位元 $e \in N$ を取れば $NgN = g = gN$ がある □

Definition III.14. G : 群、 $S \subset G$

$C(S) := \{g \in G | \forall s \in S, gs = sg\}$ とする. これを S の G における中心化群という. なお、 $C(G)$ を G の中心という

$\forall c \in C(G), \forall g \in G, cg = gc$ から、任意に $h \in G$ を取つて、 $hch^{-1}g = hh^{-1}cg = cg = gc = gchh^{-1} = ghch^{-1}$ がある、i.e. $hch^{-1} \in C(G)$. よって、 $C(G) \triangleleft G$

Definition III.15. G : 群、 $S \subset G$

H は S を包含する最小の部分群であると、 $N(S) = \{n \in G | nH = Hn\}$ とし、 $N(S) \triangleleft H$ がある. この $N(S)$ を S の正規化群という

IV. 共役と共役類

Definition IV.1. $d, f \in G, \exists g \in G, s.t. g d g^{-1} = f$ なら、 d と f が共役といい、 $d \sim f$ で表す

この共役関係は同値関係、なぜなら

1. $g = g g g^{-1}$ から $g \sim g$
2. $d \sim f$ とすると、 $\exists g \in G, s.t. g d g^{-1} = f$ から、 $d = g^{-1} f g = g^{-1} f (g^{-1})^{-1}$ 、 $f \sim d$
3. $d \sim f, f \sim h$ とすると、 $\exists g_1, g_2 \in G, s.t. h = g_2 f g_2^{-1} = g_2 g_1 d g_1^{-1} g_2^{-1} = g_2 g_1 d (g_2 g_1)^{-1}$ から、 $d \sim h$

Definition IV.2. $a \in G$ を包含する同値類 $Cl(a) = \{g a g^{-1} | g \in G\}$ を a の同値類といい、 G での互いに共役な元からなる集合は G の共役類という

Corollary IV.3. 互いに共役な元の位数は同じ

Proof. $g d g^{-1} = f$ を考える. $Ord(f) = m$ とすると、 $f^m = e$
 すると $d^m = g^{-1} (g d g^{-1})^m g = g^{-1} f^m g = g^{-1} e g = e$ □

V. 直積と半直積

Definition V.1. G, H : 群

$\forall (g_i, h_i) \in G \times H, (g_1, h_1)(g_2, h_2) := (g_1 g_2, h_1 h_2)$ 、この演算と集合 $G \times H$ は群になる、これを G と H の直積という

ここで、単位元は明らかに (e_G, e_H) である

Definition V.2. 任意個の群 $\{A_\lambda\}_{\lambda \in \Lambda}$ を考える

これらの直積は写像 $\{a: \Lambda \rightarrow \mathcal{A} | \forall \lambda \in \Lambda, a(\lambda) \in A_\lambda\} \subset Map(\Lambda, \mathcal{A})$ (ただし、 $\mathcal{A} := \bigcup_{\lambda \in \Lambda} A_\lambda$)

Corollary V.3. $\forall G, K$: 群、 $H \triangleleft G, J \triangleleft K$ とすると、 $(G \times K) / (H \times J) \simeq G/H \times K/J$

Definition V.4. G : 群、 G は部分群 H と正規部分群 N が存在し、 $G = NH$ をみたすかつ $N \cap H = \{e\}$ なら G は N と H の内半直積といい、 $G = N \rtimes H$ で表す

VI. 群同型と群準同型

Definition VI.1. 群 G と K に対し、 $\forall x, y \in G, f(x)f(y) = f(xy)$ をみたす全単射 $f: G \rightarrow K$ が存在するなら、これらの群が同型といい、この写像を同型写像という。また、群 G から自身への同型写像はこの群の自己同型写像とよび、 $Aut(G)$ で表す

Definition VI.2. 群 G と K に対し、写像 $f: G \rightarrow K$ は $\forall x, y \in G, f(x)f(y) = f(xy)$ をみたすなら、 G と K は準同型といい、この f を準同型写像という。

Proposition VI.3. 準同型写像 $\phi: G \rightarrow H$ とすると

1. $\phi(e_G) = e_H$
2. $\phi(g^{-1}) = \phi(g)^{-1}$

Proof. 1. $\phi(e_G) = \phi(e_G e_G) = \phi(e_G) \phi(e_G)$

2. $\phi(g^{-1}) \phi(g) = \phi(g^{-1} g) = \phi(e_G)$ 、さらに (1) より $\phi(g^{-1}) \phi(g) = e_H$ □

Definition VI.4. 準同型写像 $f: G \rightarrow H$ に対して、 f の核を $Ker(f) := \{u \in G | f(u) = e_H\}$ と定義し、また f の像を $Im(f) := \{f(u) | u \in G\}$ で定義する

$u \in \text{Ker}(f)$ とすれば、 $\forall g \in G$

$$\begin{aligned} f(g^{-1}ug) &= f(g)^{-1}f(u)f(g) \\ &= f(g)^{-1}e_H f(g) \\ &= f(g)^{-1}f(g) \\ &= e_H \end{aligned}$$

があるから、 $g^{-1}\text{Ker}(f)g = \text{Ker}(f)$ より、 $\text{Ker}(f)$ は G の正規部分群である

Theorem VI.5. **準同型定理**

$\phi: G \rightarrow H$ を群の準同型写像とすると、 $\text{Im}\phi \simeq G/\text{ker}\phi$
(\simeq は二つの群が同型であることを表す)

Proof. $N = \text{ker}\phi$ とおく、 $\psi: G/N \rightarrow \text{Im}\phi$ を $\psi(gN) = \phi(g)$ と定義する。 $gN, g'N \in G/N$ は $gN = g'N$ となる元とする。これらの ψ での行き先が一致することを確認する。 $\psi(gN)\psi(g'N)^{-1} = \psi(gg'^{-1}N)$ である。 $gN = g'N$ より $gg'^{-1} \in N$ であるから、右辺は $\psi(N) = e_{\text{Im}\phi}$ となる。 よって、 $\psi(gN) = \psi(g'N)$ であり、 ψ は写像になっている
 $gN, g'N \in G/N$ を取る

$$\begin{aligned} \psi(gNg'N) &= \psi(gg'N) \\ &= \phi(gg') \\ &= \phi(g)\phi(g') \\ &= \psi(gN)\psi(g'N) \end{aligned}$$

よって、 ψ は準同型である。

ψ の全射性は定義より明らかであり、 $gN \in G/N$ は $gN \in \text{Ker}\psi$ をみたすものとし、 $e_{\text{Im}\phi} = \psi(gN) = \phi(g)$ より、 $g \in \text{Ker}\phi = N$ であるから、 $gN = e_{G/N}$ で、 ψ は単射である。 よって、 ψ は全単射である \square

Theorem VI.6. **同型定理**

G : 群、 H : G の部分群。 N を G の正規部分群とすると、 $(HN)/N \simeq H/(H \cap N)$ が成立する

Proof. $\phi: H \rightarrow (HN)/N$ を $h \mapsto hN$ と定義すると、これは準同型である。 このとき $\text{Ker}\phi = H \cap N$ であるから、 $(HN)/N \simeq H/(H \cap N)$ \square

Theorem VI.7. G : 群、 $H, K \triangleleft G, K \triangleleft H$ とすると、 $(G/K)/(H/K) \simeq G/H$ が成立する

Proof. $\phi: G/K \rightarrow G/H$ を $\phi(gK) = gH$ と定めると、これは準同型になる。 このとき $\text{Ker}\phi = H/K$ であるから、準同型定理より $(G/K)/(H/K) \simeq G/H$ \square

* Electronic address: 306581756@qq.com